

Danielle Ofri (原著) 堀内志奈 (訳)

医師の感情―「平静の心」がゆれるとき

徳田安春 (JCHO 本部総合診療顧問)

この本が書店に並べられて最初にタイトルを見かけた時、ある種の衝撃を受けた。というのは、タイトルは『医師の感情』であるが、副題が“「平静の心」がゆれるとき”となっていたからだ。「平静の心」とはオスラー先生が遺した有名な言葉であり、医師にとって最も重要な資質のことであったからだ。医師にとって最も重要な資質である“「平静の心」がゆれるとき”とはどういうときなのか、これは非常に重要なテーマについて取り組んだ本であると直観的にわかった。

この本を実際に手に取ってみると訳本であった。原題は“*What Doctors Feel*”である。なるほど、この本はあの良書“*How Doctors Think*” (邦題『医者は現場でどう考えるか』、石風社、2011年) が扱っていた医師の思考プロセスの中で、特に感情について現役の医師が考察したものである。“*How doctors think*”は誤診の起こるメカニズムについて医師の思考プロセスにおけるバイアスの影響について詳細に解説していた。一方、この本は、無意識に起きている感情的バイアスについて著者自身が体験した生々しい実例を示しながら解説したものである。リアルストーリーであり、説得力がある。

医師も人間であり感情を持つ。感情の中で、共感とは医療人にとっては非常に重要なものである。このもともと人間として持っていた共感という感情が、医学生から研修医となるとときにどのように失われていくのかを克明に記載している。このように、ある感情が失われていくのも医師の特徴なのだ。そして悲しみの感情もそうだ。

医師の感情の中でむしろ特徴的なものは、恐れや恥という感情である。不確定性に満ちた臨床における恐れプレッシャーは強い。診療現場での失敗に対するネガティブなラベリングの文化が蔓延しているため、失敗したときに、みんなから非難が下されることに対する恐れは感情は大きい。ほとんどの医師が気付いていないことであるが、医師は自分の失敗を認めようとしたくないという恥の感情を強く持つということである。

医師はバーンアウトが多い。バーンアウトによる脱人格化で気難しい性格となった医師も多い。日本でも、医師をやめてビジネスに転向した人も多いようである。臨床現場の中で変貌していく自分の感情に耐えきれなくなった人もいるのであろう。

この本はアメリカの臨床医によるものであるが、日本の医師の感情にも共通部分が多い。気難しい医師、とっつきにくい医師、変な医師、などという人たちを日ごろから相手にしている人たちは本書を読むことによってかなり理解できる部分があるだろう。看護師、薬剤師、医療クラーク等の人たちにもお薦めしたい。もちろん、医学生は自分自身の感情がどのように今後変化するかを前もって知るうえで大変貴重な本となるだろう。また、病院の院長や事務長などの経営者はこれを読むことにより、従業員である医師をどう動かすかということを感じ面からも把握しておくことはとても役に立つと思う。

(四六版 頁384 2016年 定価: 本体3,200円+税 [ISBN978-4-260-02503-4] 医学書院刊)